

浜 藤 の 花

妹がきるひとへのきぬのかたにせむわが名づけつる浜藤の花

南溟のはてスンバ島の守備に任じていた予備陸軍歩兵中尉蓮田善明から、郷里熊本なる夫人のもとに送られた歌である。軍用葉書のたよりの端に認めてあり、それが夫人の手もとにとどいたのは、昭和十九年六月二十五日のことであつた。夫人の話によると、この歌には別にことわりがきはないが、時期からいって、ふたりの結婚記念日にちなんだ詠にちがいないという。

花 蓮田が二度目の召集をうけたのは、昭和十八年の秋もすでに深くなつてからであつた。そのころ彼は成城高等学校に勤務していたが、その夜豪雨をついて世田谷の自宅に集まつた知友数名と、心ばかりの別杯を交わし、翌朝はもう離京である。そして一旦郷里の部隊に入ったが、まもなく南方へ向け発つていった。まことに慌しい別離であつた。シンガポールを経てスラバヤに上

陸、与えられた任務につくためスラバ島に向かつてそこを発つたのは、その年もおしつまつた二十八日夕刻であつた。その日のひる前、折りから南方派遣文士としてスラバヤに在つた佐藤春夫先生と、朝日新聞支局の一室で邂逅したことは、不思議な縁であつた。そのとき蓮田が佐藤先生に託した歌稿「おらびうた」は、東京出発からシンガポール上陸まで詠みためた長歌・短歌あわせて二百首から成るもので、われわれ友人の手にとどけられてから、まもなく活字にもうつしたので、一部の人々の目にふれる機会もあつたかと思う。

佐藤先生の「遭遇——スラバヤに於ける蓮田善明君」(昭和十九年八月『文芸文化』)の一文によると、蓮田はその朝、これから渡る島は食も住もすべて自給自足の用意があるので、大工道具や農耕用具、それに野菜の種子など、方々探して買い集めたところだといつていたという。そのとき佐藤先生は、自分の手首にまいていられた夜光時計をはずして、蓮田に対するはなむけとされ、欣然として別れをつける蓮田を、支局の玄関口に送られたそうである。

右の文章を、佐藤先生はつぎのように結んでいられる。

……窓外にうつるふ日かげを見てゐたが、時計の三時半になつてゐるのを見てから、そろそろ帰つて出発の用意でもしませうか、宿は市外の営舎に兵と一緒にですが、この地にもあとは二時間ばかりとなりましたから、と拳手の礼をすると、壁にもたせかけた軍刀を腰間に下げて玄

関口に出た。僕が君の武運長久を祈ると、君は僕の平安を祝して再び挙手して別れ去つた。後を見送つてゐると七、八歩元氣よく踏み出してから、三度目に挙手したのは、あたりになるた富永氏（支局長）が君を見かけて礼を送つたのに答へたものらしかつた。

冒頭にかかげた歌は、新しい任地スンバ島で詠まれたものであろう。「浜藤の花」はむろん植物図鑑に登録されている花ではない。しかし、南国の太陽の光をうけて、海近くに咲いている、日本の藤に似た名もない花、見なれるにつれて親しみを増してくる花、ある日ふと、蓮田の口をもれたのがこの名であつたのだろう。浜藤の花！改めて自分でそう呼んでみると、いよいよ親しさを加える花である。郷家の庭の藤棚に垂れさがつた豊かな花房の映像が、何かのときふとこの花の上に重なつたりする。

この「浜藤の花」を結句にすえた「妹がきる……」の歌の発想は、わが国の相聞歌の伝統を踏むもので、「わが名づけつる、浜藤の花」を「妹がきる、ひとへのきぬのかたにせむ」としたところに、波濤万里を隔てたかなたの夫人へのやみがたい恋情が、切ないまでの孤線を描いて歌いあげられてゐるのを見る。もうすでに、蓮田にとっては単なる異境の野の花ではなくなつた「浜藤の花」が、愛する夫人の着る楚々たる単衣に型として押されている。右の歌をうたいあげた瞬間、このような単衣を身にまとうてほほえみかける夫人のイメージが、蓮田の目の前にはつきりと浮

かんだにちがいない。

そしてこの歌が、夫人への永訣のことばとなったのである。

スンバ島で一年数個月を送った蓮田は、迫撃砲中隊長としてマレー半島ジョホールバルへ転駐を命ぜられた。そしてそこで終戦を迎えたが、それからまもなく、拳銃を右のこめかみに当ててみずからの命を絶った。そのとき、左手に強く握られていた紙片を、ちらと見たという人の報告によると、それには、一首の歌らしいものが書きつけてあったが、その文句は確認するまでもなく、憲兵の手にもぎ去られたという。蓮田にとって、これが世にいう辞世であったかも知れない。しかし、わたくしは、辞世ならぬ「妹がきる……」の歌一首を、彼の最後のことばとして、そのことばにこめられた恋情の重みを、ながく胸にたしかめてゆきたいと思う。